

対話の可能性 / 記録と想起
イメージの家を歩く / 関連上映会

夏時間の庭

12.19 FRI
12.20 SAT
12.21 SUN

せんだいメディアテーク
7階スタジオシアター

料金 | 各回500円

12月19日は1000円でトークイベントを含む、
12月21日の『夏時間の庭』は無料上映

「3がつ11にちをわすれないためにセンター」(「わすれん!」)の映像アーカイブを活用した展覧会「記録と想起・イメージの家を歩く」の関連企画として、わすれん!に参加した映画監督や映像作家による作品を上映します。わすれん!に見られるような記録映像(=ドキュメンタリー)は、記録であるがゆえにノンフィクションだと言えるかもしれませんが、しかし、実際に映像を制作する人たちのなかには劇映画やドラマなどのフィクションとの差はあまりなく、地続きであると考える人もいるようです。この上映会では、わすれん!の参加者であり、映画監督の濱口竜介が、フィクションとノンフィクションの境目をテーマに選定した映画作品をあわせて上映し、記録と創作の関係性を取り上げます。

会期 | 12月19日(金)、20日(土)、21日(日) 会場 | 7階スタジオシアター

料金 | 各回500円(12月19日は1000円でトークイベントを含む、12月21日の『夏時間の庭』は無料上映)

12月19日 | 金 |

19:00 ~

『ASAHIZA 人間は、どこへ行く』

「かたログ vol.23」

※酒井耕、濱口竜介、藤井光による鼎談イベント

12月20日 | 土 |

10:00 ~

『なみのおと』

14:00 ~

『飯舘村 わたしの記録』

『村に住む人びと』

17:00 ~

『夜の女たち』○

19:00 ~

『ポンヌフの恋人』○

12月21日 | 日 |

10:00 ~

『なみのこえ 気仙沼』

13:00 ~

『なみのこえ 新地町』

16:00 ~

『夏時間の庭』○

※無料上映

○は濱口竜介監督による選定作品

「かたログ」とは？

濱口竜介と酒井耕が、2011年より仙台に滞在し、『東北記録映画三部作』を共同監督する傍らUstream配信していた「わすれん!」の番組。作品の制作過程で生まれるふたりの疑問や課題を整理するための会議としてゲストを招くなどしながら実施されてきた。

濱口竜介

1978年生まれ。映画監督。2008年、東京藝術大学大学院映像研究科修了。『PASSION』(2008)がサン・セバスチャン国際映画祭にて高い評価を得る。以降、『親密さ』(2012)、『東北記録映画三部作』(2011-2013)『不気味なもの肌の触れる』(2013)など意欲的に作品を発表している。

酒井耕

1979年生まれ。映画監督。2007年、東京藝術大学大学院映像研究科修了。作品に『ホームスイートホーム』(2006)、『東北記録映画三部作』(2011-2013)など。映画制作のほかに「みやぎ民話の会」と伝承民話の映像記録活動も行っている。

藤井光

1976年生まれ。美術家・映画監督。パリ第8大学美学・芸術第三博士課程DEA卒。主に映像による静的な表現によって、現代日本の社会政治状況を直截的に扱う。震災後は東北各地で撮影を続け、映画と美術の境界線を行き来する活動をしている。

作品選定理由

まず「フィクションとノンフィクションの境目を再検討する」性格を持った今回の上映会においていったい何を選ばなかったかを明らかにしておく。第一に「カメラを睨め付けること（撮影者の存在を暴露する）」ことや「つなぎ違い（編集点の存在を強調する）」を含むことで、撮影や編集にそもそも内在するフィクション性を強調する作家・作品は選ばなかった。端的には小津*¹とゴダール*²は選ばなかった。また「演じること」を自覚的に主題とする作品群——例えばシュミット『書かれた顔』*³やカサヴェテス『オープニング・ナイト』*⁴などは選ばなかった。

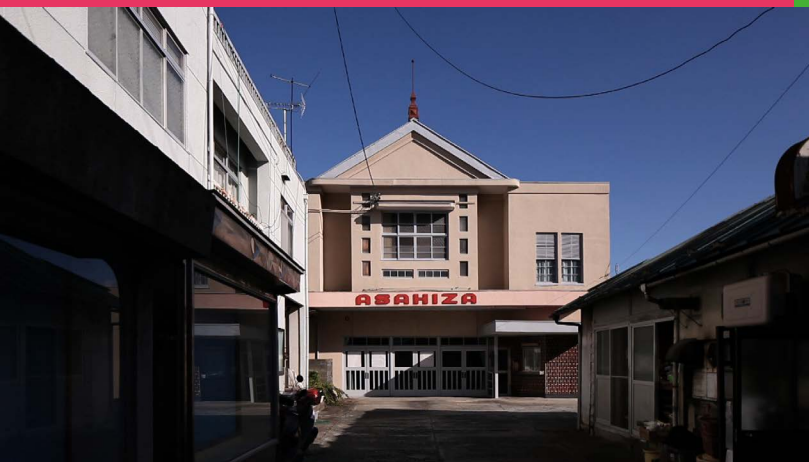
今回選んだのは言うなれば素朴な劇映画だ。ここで言う「素朴」さは、役者が書かれた脚本を記憶／解釈し、ある種のリアリズムに基づいて（自らの演技性の暴露ではなく、登場人物の「実在」を志向して）演じることから成る映画に宿る。

カメラという圧倒的な記録装置の前で「演じる」という怪しく儂い行為を差し出す。そんな最も困難な挑戦において、誠実さと、知恵と、勇気（狂気?）によって類稀な成果を示している3本を選んだ。（濱口）

- *1…映画監督で脚本家の小津安二郎（1903-1963）。登場する役者がカメラに向かって話すなどの撮影手法で知られる。
- *2…フランス・スイスの映画監督のジャン＝リュック・ゴダール（1930-）。画面のゆるやかな連続性を排してカットを繋ぎ合わせるジャンプ・カットなど、特徴的な撮影手法を用いる。
- *3…『書かれた顔』はスイスの映画監督でオペラ演出家のダニエル・シュミット（1941-2006）による歌舞伎女形坂東玉三郎のドキュメンタリー映画作品。伝統的な演目のほかに創作劇を組み込み、女を演じるということに迫る。
- *4…『オープニング・ナイト』はアメリカの映画監督で俳優のジョン・カサヴェテス（1929-1989）による映画作品。目の前でファンの少女が事故死したことをきっかけに情緒不安定となるブロードウェイ女優の混乱と、苦悩の中に立ち現れる演技を描く。

※凡例（監督・制作者／製作年／製作国／作品時間／上映媒体）

12.20



『ASAHIZA 人間は、どこへ行く』

『ASAHIZA 人間は、どこへ行く』

藤井光／2013年／日本_福島／74分／Blu-ray

1923年に福島県南相馬市に開設され、約70年に渡り地域の文化拠点として親しまれた映画館「朝日座」。その「朝日座」にまつわる地域の人々の記憶を導きだしながら、過疎と震災に見舞われた町の姿と歴史を見つめるとともに、劇場の社会的な役割を問いかける。



『ASAHIZA 人間は、どこへ行く』

『なみのおと』

酒井耕・濱口竜介／2011年／日本_気仙沼、南三陸、石巻、東松島、新地／142分／Blu-ray

東日本大震災で津波の甚大な被害を受けた東北地方三陸沿岸部に暮らす姉妹、消防団員仲間、市議会議員、夫婦などが、身近な者同士で、あるいは酒井・濱口両監督と、互いに向き合いながら震災について語り合う様子を記録したドキュメンタリー。対話を通して、それぞれの被災体験の生々しさと悲痛さが切実な声で語られる。



『なみのおと』©silent voice



『村に住む人々』

『村に住む人々』

岩崎孝正 / 2014年 / 日本_福島 / 48分 / Blu-ray

東京で震災に遭遇し、故郷の福島県相馬市磯部に戻った作者が、家族や安否確認で出会う友人に震災からのことについて問いかける。友人たちは避難所運営などに携わり、僧侶の父は法要を執り行い続けた。そして3年、地元の先輩後輩らにより立ち上げられた伝統の神楽が家々を奉納して回る。地域の営みを見つめた記録。



『ボンヌの恋人』©1991 STUDIOCANAL France2Cinema

『夜の女たち』

溝口健二 / 1948年 / 日本 / 73分 / 35mmフィルム

「パンパン（売春婦）」たちの物語が、戦後の荒漠とした町並みにおけるロケーション撮影と、セットとして作られた瓦礫の奇妙なマッチングのもと展開される。小津安二郎『風の中の雌鳥』とともに日本のネオ・リアリズムと呼んでいいだろう。たった1ショットで女が「夜の女」へと変貌する様に、溝口健二の真骨頂を見る。（濱口）

『飯館村 わたしの記録』

長谷川健一・細谷修平 / 2013年 / 日本_飯館村 / 68分 / Blu-ray

福島県飯館村で酪農を営んできた長谷川健一が、東日本大震災による原発事故後、ホームビデオを手に取り撮影した全村避難となるまでの4ヵ月間の記録。飼育している牛から搾った大量の牛乳を自ら捨てる様子や、鳴り続けるガイガーカウンターの音。故郷に身を置き、当事者として、切々と変わりゆく風景と日常を見つめる。



『飯館村 わたしの記録』

『ポンヌフの恋人』

レオス・カラックス／1991年／フランス／125分／35mmフィルム

主演ドニ・ラヴァンの役名から「アレックス三部作」に数えられる1本。演技の本質は話すことでも動くことでもなく「別の名を与えられること」に存する。監督カラックスの別人格とも言える「アレックス」はしかし、ラヴァンともカラックスとも違う地点に誕生する。そこをひとまずフィクションと呼ぶことができるだろう。(濱口)



『なみのこえ 新地町』©silent voice



『なみのこえ 気仙沼』©silent voice

『なみのこえ 気仙沼』 『なみのこえ 新地町』

酒井耕・濱口竜介／2013年／日本_気仙沼、新地／109分、103分／Blu-ray

『なみのおと』の続編。震災から約1年後、「聞く相手を被災の過酷さや体験談の鮮烈さで選ばない」ことを踏まえ、宮城県気仙沼市と福島県新地町に暮らす人々に語り手を絞って撮影された。対話では、被災体験のほかにも生活や生業、家族や友人との関わりなどについて語られ、それらの言葉からは個々の人生が滲み出る。

12.21



『夜の女たち』©1948 松竹株式会社

『夏時間の庭』

オリヴィエ・アサイヤス／2000年／フランス／102分／DVD

オルセー美術館20周年を機に制作された本作は「本物」の絵画や調度品を扱う「寄贈」を巡る物語だ。モノの移動を描くことで必然的に役者から動きを引き出す。その点では成瀬巳喜男のであるが、流麗な撮影はジャン・ルノワールを想起させる。エリック・ゴートイエの撮影技術が自由な演技と拮抗し、説話の現在形を更新する。(濱口)



『夏時間の庭』©2008 MK2 SA-France 3 cinema

対話の可能性

人と人のあいだには、性と性のあいだには、人と人以外の生きもののあいだには、どれほど声を、身ぶりを尽くしても、伝わらないことがある。思いとは違ふことが伝わってしまうこともある。〈対話〉は、そのように共通の足場をもたない者のあいだで、たがいに分かりあおうとして試みられる。そのとき、理解しあえるはずだという前提に立てば、理解しえずに終わったとき、「ともにいられる」場所は閉じられる。けれども、理解しえなくてあたりまえだという前提に立てば、「ともにいられる」場所はもうすこし開かれる。

対話は、他人と同じ考え、同じ気持ちになるために試みられるのではない。語りあえば語りあうほど他人と自分との違いがより微細に分かるようになること、それが対話だ。「分かりあえない」「伝わらない」という戸惑いや痛みから出発すること、それは、不可解なものに身を開くことなのだ。

「何かを学びましたな。それは最初はいつも、何かを失ったような気がするものです」(バーナード・ショー)。何かを失ったような気になるのは、対話の功績である。他者をまなざすコンテキストが対話のなかで広がったからだ。対話は、他者へのわたしのまなざし、ひいてはわたしのわたし自身へのまなざしを開いてくれる。

対話は、生きた人や生きもののあいだで試みられるだけではない。あの大震災の後、わたしたちが対話をもっとも強く願ったのは、震災で亡くした家族や友や動物たち、さらには、ついに“損なわれた自然”をわたしたちが手渡すほかなくなってしまった未来の世代であろう。そういう他者たちもまた、不在の、しかし確かな、対話の相手方としてある。

せんだいメディアテーク館長 鷺田清一


お問い合わせ

せんだいメディアテーク 企画・活動支援室
〒980-0821 宮城県仙台市青葉区春日町2-1
電話 022-713-4483
FAX 022-713-4482
e-mail office@smt.city.sendai.jp

主催 せんだいメディアテーク
(公益財団法人 仙台市市民文化事業団)
助成 一般財団法人 地域創造

せんだいメディアテークへのアクセス

地下鉄 仙台駅から泉中央行きで3分、
勾当台公園駅下車。「公園2」
出口から徒歩6分。
バス 仙台市営バス仙台駅前-29番
(荘内銀行前)のりばから
「定禅寺通市役所前経由交通局
大学病院」行きで約10分、
メディアテーク前下車。
徒歩 仙台駅より約20分。
タクシー 仙台駅西口タクシー乗り場から約7分。
自動車 東北自動車道仙台宮城ICから約10分。
航空機 仙台空港アクセス鉄道・仙台空港駅
から仙台駅まで約25分。

 **せんだいメディアテーク**
sendai mediatheque

裏面には対話の可能性「考えるテーブル プロジェクト図鑑」を掲載しています
この用紙はリサイクルできます

